

〈研究成果の紹介〉

水稲新品種「みえのゆめ」の高品質栽培法

農業研究部 作物グループ

1. 成果の内容

平成13年度に奨励品種に採用された「みえのゆめ」は、「ヤマヒカリ」より成熟期が1～2日程度遅い中生クラスの品種で、「ヤマヒカリ」で問題となっている胴割粒や穂発芽粒の発生が少ない品種です。

そこで、「ヤマヒカリ」の代替品種として本品種の普及拡大をはかるため、高品質で安定的に生産するための栽培方法を明らかにしました。

1) 移植時期

伊賀地域では収量、品質の安定する5月中旬移植が最適です。一方、伊勢平野部では早い作期で出穂時期が早まり、登熟期間の高温により整粒歩合が低下する年もみられたことから、5月上旬以降の移植が適当と考えられました(図1)。

2) 栽植密度

15～21株/m<sup>2</sup>の範囲で、収量及び外観品質に与える影響は小さいと考えられました(データ略)。

3) 施肥方法

「みえのゆめ」は「ヤマヒカリ」よりやや短稈で、耐倒伏性に優れます。しかし、基肥窒素量を増加することで籾数は多くなりますが、登熟歩合が低下し収量はあまり増えません。また、整粒歩合も登熟歩合の低下とともに低くなりました。登熟歩合85%以上、収量600kg/10aを目標とすると、籾数を30,000～35,000百粒/m<sup>2</sup>とする必要があり、穂数で350～420本/m<sup>2</sup>、最高分けつ数で500～650本/m<sup>2</sup>が適正な生育量となります。場内試験では基肥窒素量が側条施肥で4～6kg/10aが適当でした。その場合、穂肥として出穂20日前に窒素量で3kg/10a施用するか、出

穂20日前と10日前に窒素量で2kg/10aづつ分施することで登熟歩合及び整粒歩合が高まりました(データ略)。

一方、緩効性肥料の全量基肥施用(N8,P2.56,K4.16kg/10a)により、標準施肥体系(基肥：N,P,K各5kg/10a、穂肥：出穂20日前にN,K各3kg/10a)と同等の収量、品質が得られました(データ略)。

4) 収穫適期

「みえのゆめ」は「ヤマヒカリ」と比較して、籾水分の低下にともなう胴割粒の増加が緩やかで、刈り取り適期幅が広いと考えられました(データ略)。

5) 病害虫防除

ごま葉枯病に弱いことから防除対策が必要です。種子消毒剤として「銅」・フルジオキシニル・ペフラゾエート水和剤(商品名：モミガートC)が、本田防除剤としてメトミノストロピン粒剤(商品名：オリブライト1キロ粒剤)を6月下旬に処理することが有効と考えられました(表1)。

2. 技術の適用効果と適用範囲

伊賀および北勢の中山間地域では主要品種である「ヤマヒカリ」の代替品種として、平野部でも「コシヒカリ」に集中する本県稲作の作期分散品種として利用できます。

3. 普及・利用上の問題点

1) 試験は、やや地力の高いほ場で行った結果です。施肥量は土壌や前作条件により多少変える必要があります。

2) 白葉枯病には弱い品種なので、常発地での栽培は避ける必要があります。

(中山 幸則)

表1 「みえのゆめ」のごま葉枯病の本田防除 (H14、上野)

供試薬剤	7/25			8/29		
	発病株率(%)	株当り病斑(数)	防除値	発病株率(%)	発病度	防除値
オリブライト1キロ粒剤	76.7	1.6	97.0	13.4	4.5	84.0
オリブライト1キロ粒剤+ ブラシンフロアブル	75.0	1.8	96.7	1.7	0.6	97.8
無処理	100.0	54.1	—	75.5	28.2	—

注1) オリブライト1キロ粒剤は6/28、ブラシンフロアブルは8/5(出穂期)に処理  
注2) オリブライト1キロ粒剤処理時の発病株率は100%、株当りの発病数は12.4であった。

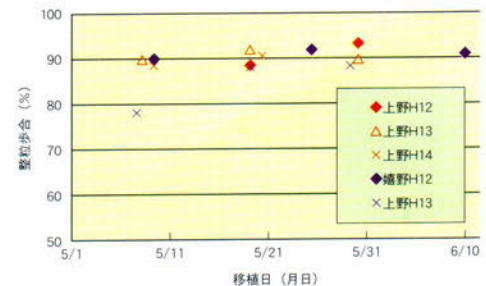


図1 移植時期と整粒歩合